

# ジュラシック・トーク

シューベルトの「交響曲第8番」のエンディングについて

シューベルトの作品には、自筆稿の記号が「アクセント」か「ディミヌエンド」かという問題が付いて回ります。以前ニューフィルで演奏した「未完成」でも、昔出版された楽譜ではディミヌエンドになっていたところが、新しい楽譜ではアクセントに変えられていました。今回の「8番」でも同じようなことが、終楽章の最後で起きているのです。昔のスコア（ブライトコプフ旧版）では①のようにディミヌエンドになっています。しかし、新しい原典版である、ベーレンライター版では同じ個所が②のようにアクセントに変わっています。ティンパニだけアクセントがありませんが、ディミヌエンドは書かれていません。

ところが、同じ原典版でもブライトコプフ新版では、③のように、（注釈つきで）旧版と同じなのです。他の部分では、旧版ではディミヌエンドだったところはきちんとアクセントに直っているのに、肝心のこの部分がこうなのです。この校訂を行ったのは、同じブライトコプフ新版でベートーヴェンの交響曲のうちの何曲かを校訂していたペーター・ハウシルトです。この人は「第9」も担当していて、終楽章の「vor Gott」のフェルマータの部分を、旧全集ではティンパニだけがディミヌエンドだったところを、オーケストラ全体でディミヌエンドするようにしていました。こういうのが好きなんですね。末廣さんはそれを見て「こんなの、ありえません！」と激怒されていましたね。最後だけではなく、その他の部分も、この2つのスコアを見比べてみたのですが、思った以上に違っていました。佐々木さんは、新しいスコアをお使いになるそうなのですが、果たしてどちらになるのでしょうかね。

①



②



③



\* M. 1153 see "Kritischer Bericht"

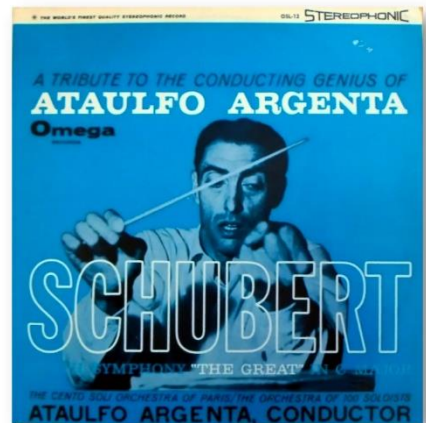
ただ、まだスコアを見たことがなかったころは、どんなレコードを聴いても、この曲の最後は間違いなく堂々とした終わり方でしたから、こんなことは全く分かりませんでした。当時はもちろん①の楽譜しかなかったはずですから、おそらく指揮者たちは、これはいくらなんでもおかしいのでは、と判断して、ほぼ「慣習的」に、ここでのディミヌエンドはあえて無視して、ガンガン鳴ったまま終わるようにしていたのではないのでしょうか。

そこで、NMLにある100個以上のこの曲の音源を全部聴いてみて、果たしてこの楽譜通りに演奏している人がいるのかどうか、調べてみましたよ。その結果、ここでディミヌエンドをかけている指揮者は、

- ・アタウルフォ・アルヘンタ/セント・ソリ管弦楽団 (OMEGA/1957年録音)
- ・オットー・クレンペラー/フィルハーモニア管弦楽団 (EMI/1960年録音)
- ・セルジウ・チェリビダッケ/RAI交響楽団 (URANIA/1961年録音)
- ・ラファエル・クーベリック/バイエルン放送交響楽団 (AUDITE/1969年録音)
- ・クラウス・テンシュテット/ベルリン・フィル (EMI/1983年録音)
- ・ゲオルク・ティントナー/シンフォニー・ノヴァ・スコシア (NAXOS/1990年録音)
- ・ニコラウス・アーノンクール/ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団 (TELDEC/1992年録音)
- ・マルチェッロ・ヴィオッティ/ザールブリュッケン放送交響楽団 (CLAVES/1992年録音)
- ・セルジウ・チェリビダッケ/ミュンヘン・フィル (EMI/1994年録音)
- ・小澤征爾/サイトウ・キネン・オーケストラ (DECCA/1996年録音)
- ・フィリップ・ヘレヴェッヘ/ロイヤル・フランダース・フィル (PENTATONE/2010年録音)
- ・フィリップ・ジオルダン/ウィーン交響楽団 (VSO/2015年録音)

と、思った以上にたくさんいました。小澤までが入っていたのは意外でしたね。

とは言え、9割以上の大指揮者たちが、あえて楽譜に背いてまでディミヌエンドをかけていないのは、やはりそれが作曲家の意思だからと感じていたからなのでしょう。



しかし、同じ作品なのに、CD (レコード) の場合、このように「7番」、「8番」、「9番」と3種類もの番号が存在しているのは困ったものです。もちろん、圧倒的に多数を占めているのは、長い間親しまれてきた「9番」です。確かに、学術的には「8番」が正しいのですが、その呼び名は結局レコード業界には受け入れられなかったということになるのでしょうか。アルヘンタ盤のように、番号をなくしたものもありますね。コンサートでは、「8番」がかなり浸透しているのとは対照的な現象です。